

◇母が伝える被爆証言

日本原水爆被害者団体協議会 事務局次長 和田征子氏

私は1歳10ヵ月のとき、長崎の爆心地から2.9kmの自宅で被爆しました。その光景を見ていないのに体験を語ることはためらいますが、被爆者の平均年齢が84歳になり、私のようなものでも何か話さないといけないという思いで母から聞いたことを語っています。

自宅が長崎市東方の金毘羅山のかげにあり、助かりました。母が外に出て山に目をやると、蟻の行列のような真っ黒い人の行列が、山を上って逃げてくるのが見えました。それから毎日、毎日、朝から遺体を山積みにして茶毘にふす作業が続きました。そのときの匂いが忘れられない。母は「人はごみのように焼かれるために生まれてきたのではない」と言っていました。母の友達は、原爆の威力や爆圧、熱度などを計測する観測器・ラジオゾンデが落下傘に吊るされ落ちてくるのを見たと言っています。

母は、8月9日がくると「キノコ雲の下で何が起こったか、その下には生活者の命があり、くらしがあったことを匂いとともに思い出す」「(原爆で)人間の尊厳や一人ひとりの大切なものを失った」と切実な思いで話してくれました。

